

ウォーミングアップ

神や仏という文字は中国のもので、buddha が中国では仏陀になるごとく、神も仏も日本に入れば変化する。神様、仏様、稲尾様という云い方は、インドにも中国にもないでしょう。実に日本的なものです。それを考える前に、あたりまえで分かり切ったことから、ウォーミングアップをはじめたい。時と場合で文調が変わってしまいますが、あしからず。

人は目で状況を判断する。初めてのものであれば、形、サイズ、位置、速度、色などを識別する。音がすれば、耳と目で音源をとらえ、初めてのものであれば、音の高低、長短、強弱、調雑を識別する。臭いがすれば鼻で嗅ぎ、芳、悪、異、刺激臭などを識別する。手でさわれるなら、軽重、温冷、柔堅、粗滑などを識別する。食べられそうなら口で甘味、酸味、塩味、苦味、うま味を識別し、舌ざわり、喉ごしなどを確かめ、毒や腐の恐れがあれば吐き出し、他人にそれらを伝え、安全なら、利用する。

人は、言(ことば)や目配せ、ジェスチャー、文字などで思っていることを伝えるが、生物も利用し易い媒体を使って、伝えあう。振幅や振動数や周期を利用し、楽譜のように拍子、音程、長短、強弱、共振などを統御すれば、さまざまな伝達が可能となる。

我々にとって、文字は生まれたときからあるのが当たり前で、意味が分からなければ辞書を引けばよい。デジタルの時計なら、何年何月何日何曜日何時何分何秒がちどころに分かる。それが当たり前で、特別のこととは思わない。だが、他人と翌日の午前9時に会う約束をし、世界から時計が消えたなら、あなたはどのようにして午前9時をみいだしますか。もし、来年の今日ここで会いましょうと約して、カレンダーが世界から消えれば、果たして会う事ができるでしょうか。もし、文字がなくなれば、約束事をどのようにして確かなものとする事ができるでしょうか。我々は、先人の苦勞をすっかり忘れ去っております。むしろ、時計が狂っていないか、電池切れを起こさないか、文字が間違っていないか、などと心配をするのではありませんか。

漢字についての体系的な辞書は、紀元100年頃、後漢の許慎(きょしん)が編纂した、「説文解字」がある。「所載の小篆の見出し字9353字、重文1163字。漢字を540の部首に分けて体系付け、その成り立ちを『象形・指事・会意・形声・転注・仮借』に分けて解説し、字の本義を記」したという。その収録は、いわゆる楷書とか行書となる前の書体、隸書体、その前の篆書体、その前の金文体に亘っている。許慎の時代には、甲骨文字の存在は知られておらず、彼は、周、春秋・戦国時代、秦、漢に亘る文字の変遷を網羅したと自負したことでしょう。

甲骨文 金文 大篆書 小篆書 隸書 楷書



(ウイキペディアより)

甲骨文字は、殷末のものとする。周の建国が紀元前 1046 年とされ、許慎を遡ること、1200 年以上となる。それほど時がたてば、文字が作り出された頃の事情はほぼわからなくなっていたでしょう。文字のない世界の人が、文字を持つ、それがどういうことであったか、などと考えるのは浮世離れた人の道楽のようなものです。

万葉の時代の日本人も文字をもたなかった。文字はなくともことばはあり、歌を作って心を通わせており、文化があった。漢字が入ってくると、自分達のことばの音に近い文字を使って、歌を文字に置き換えた。日本人は、後に、漢字の意味が分かると、意味のある文字と音だけの文字を組み合わせで表記し、音の部分をカタカナ、ひらかなに置き換えるという器用な運用をする。しかし、我が国の祖先の経験は、もともと文字のないところに文字を造り出すというものではないので、ここでは、参考にならない。

「説文解字」により漢字の説明はすべて明らかになる、切り札、オールマイティーのごとく思う人があられるかもしれませんが、そうではない。では、ウオーミングアップをこのへんで終え、「説文解字」に挑戦してみましょう。

以下に用いる甲骨文字（白川甲骨）

𠄎 申 𠄎 示 𠄎 又 𠄎 巳 𠄎 阜 𠄎 歩


神様

さて、先ず神様ですが、旧字では、神、示と申とが組み合わせられている。「説文解字」の申部に、「神なり。七月、陰気を成し、體は自ら申束（しんそく）す。臼に従ふは、自ら持（じ）すなり。吏は舗時（ほじ）を以て事を聴く。且（あした）の政（まつりごと）を申（の）ぶなり」とある。四つの事が記されている。①、神は元々「申」と記された。②、旧暦七月には陰気が内部に充ち、身体が成熟し、自ら申（のび）束（ちぢみ）する、つまり申には「伸」の意味がある。③、稲光は申でなく申とし、臼からくるとする、臼は左右の手の象でもあり、自分の両手で「」を持つとみたのであろうか。申（かさ）ね加える申重の意味がある。④、官吏は食事時に事を聴いて、翌朝、政治を申（の）べる、つまり「呻」の意味があるとしている。雷のゴロゴロ、ドーンが「呻」で何かを告げようとしているとみたのかもしれない。

神様は申様であったが、申には“のびる”とか“かさねる”とか“のべる”とかの意味が含まれており、永い変遷のなかで、申は「申（の）ぶ」が主な使用法となり、“のびる”は「伸」、「かさねる」は「重」、「のべる」は「呻」、神は「神」と意味を限定して表記したのでしょう。




示部には、「天は象を垂れ、吉凶を見（あらは）す。人に示す所以（ゆえん）なり。二に従ふ。三垂は、日月星なり。天文に觀（み）て、以て時變を察す。示は、神事なり」とある。天の意は、太陽、月、諸星の動き、雲や風や雨、天の文（あや）に現れ、吉凶を示す。天の文は天の神の意を示すものであり、天文を観測して、時の変化を察しなさいとする。今のことばでは、天文学、人の文とは人の顔色や素行（人の集団の制度や行動規範）であり、それを観察してその人や集団の意を察すること、人文学のはじめとされる。

しかし、これでは示と申で、何故神という意味に限定されたかが分からない。「説文解字」の限界です。

申は甲骨文字では、とある。ピカッと光る稲光、屈折をして地上に届くものもある。地上まで“のびる”さま、次々に連鎖し、“かさなる”さま、雷鳴がごろごろ響く、“のべる”さま、これらすべてを含んだものが申と考えてみましょう。そう気楽にしておられればいいのですが、稲光や雷はこわいものです。どこにも隠れる所がない野や山頂で雷光に遭遇するのは、実に恐ろしい。

天は、春には暖かな風を送り、木の芽をふくらませ、生物に熱を与え蠢（うご）めかせ、初夏になると青葉若葉を茂らせる。強い日の光と雨でぐんぐん物を育て、秋には実りをもたらす。寒い風や雪のなかでは物を貯蔵したり、藁で縄をつくったりと休息し、人々は天の恵みを称える。かと思えば、永い雨や雲りが続き、日照が足りず、ものが育たなく、怨めしいこともある。かんかんの旱（ひでり）で、ものが枯れ果てるかとおもえば、猛烈な風や雨で洪水を起こし、破壊をもたらすこともある。天は恵みも災いももたらす。

では、ピカピカと光りドカンと落ちる天の象、「申」とは何故起こるのか。天の怒り、警告なのか？ 雷にうたれるのは天罰か？それを「申」とした古代人の感覚が如何なるものか？に説文解字は応えてくれない。自分に落ちないようにと必死に祈った覚えはありませんか。

示は甲骨文字では、、、で、その上にお供えを置く卓、台とします（郭沫若という学者は男根といいま

すから、解釈も学者次第です)。この上に月(肉)を又(手)で置くと「祭」の字になる。お供えの台とは、“まつる”ためのものであり、示申の組み合わせは「申」を“まつる”ことです。あなたは、災いが去り恵みが来ることを祈りませんか。「申」からすれば“まつられる”こと、崇敬を受けることで、それで神威が高くなります。神々の中での序列が上がります。人と申との相関関係を介在するものが示ということでしょう。

ところが、殷の卜辞に殷の祖霊を五示、九示などと数えており、示は祖霊であり、その示のある所を宗(宗廟)とした(字統、白川静)、とある。これでは、申は天神、示は祖霊となり、神とは天神と祖霊の双方を意味することになる。時と所により、内容は変貌してゆきます。

また、祀がある。示示と巳巳であり、巳(み)は蛇です。蛇を“まつる”とは何でしょうか。「説文解字」では、巳を「四月に、陽気巳(すで)に出て、陰気巳に臧(をさ)まる。萬物見(あらは)れて文章を成す。故に巳を蛇と為す」とある。巳を“すで、既”としています。巳のことで巳とは別字です。巳(既)を“まつる”では意味をなさない、許慎はあたりまえのごとく「巳が蛇と為る」とします、どう解すべきなのか。四月には陰気が収束し陽気が出て、万物の活動を促進する、それを蛇にたとえたのでしょうか?困りますね。白川氏は、巳を、地の精霊、四方百物の属、自然の精霊とされ、それなら分かり易い。巳巳を蛇としているが、雲や虹をあらわす竜形、虫形であり、雲、竜をまつることでしょうか。水や火や木や金の精をまつるようなものとすれば意味は通る。

しかし、殷末には、王の在位を五祀、十祀と今の「在位年」のごとく数えており、五つの祖祭を終えることを一祀(一年)とみたもので、祖霊をまつることを祀とした、ともみておられる。ならば、示と巳により、精霊あるいは祖霊をまつると意味を限定したことになりますが、精霊と祖霊では対象が違いすぎ、落差にとまどう。

次は、神社の社、旧字の社は示と土、元来は土で社を意味した。「土」とは「地主」で、その地にはその地主がおり、それを“まつる”ことになる。人は、別の地に入る時には、その「地主」をまつらねば災いを得ると思っていた。平成の時代でも、他人の敷地に許可なく入ると叩きだされて文句はいえない。特に、蛮族の地に入るときは、難を避けるために、蛮族の首を手(寸)に下げて迂(迂、ゆく)、そのさまが「導」の字の由来という(字統)。異地主の地に入るには緊張感があつた。

周代になると、「その社稷(しゃしよく)の墮(あ、だん)を設けて、之が田主を樹(う)ふ。各々のその野の宜しきところの木を以てす(周礼、大司徒)」と姿をかえる。社稷は土地の神であり、ご神木でそれを表し、古い注に、「夏(か)は安邑にし、鬆(松)宜(よろ)しき。殷は亳(はく)に都し、柏宜しき。周は豊鎬(ほうけい)に都し、栗宜しき。是れ各(おのおの)其の土所の宜しき木を以てなり。其の木を用ひ以て社主とすを謂ふ」とあり、周の時代になると、封建制が採用され、諸侯が封された邦(くに)を治め、その「地主」をまつる慣習となった。論語の「夏后氏は松を以てし、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす」はそのことである。

天子は天神と祖霊を祭り、諸侯は祖霊と地主を祭るというスタイルが導入されたことになる。殷を討つに、諸族を糾合した周が、諸族を尊重したことによるのでしょうか。これは、氏(祖霊)を同じくする慣習とともに、土(土神「うぶすな」)を同じくする意識、地縁集団を育むことになる。世の仕組みが変われば、ことばの意味も変わる。神社とは、後の天神(あまつかみ)と国神(くにつかみ)との区別に通じる。ここで、天上、天下についてもう少し、伝説を辿っておきましょう。

甲骨文字とは甲骨に刻された文字であり、卜に用いられ、甲骨による卜とは、地上の帝がその行動について天の上帝に意を伺うものであった。伺うべき内容を甲骨に刻し、これを焼き、割れ目により可否を判断する。焼くにもそれを判読するにも特殊能力を持つ集団が要る。殷では、定例のものとして、十日の単位で卜を行い、それぞれの日を甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸と名付けた（十干）。10個の太陽が一度に出たという伝説があり、それぞれの太陽の名とも、卜する真人十人の名ともいう。

この十日を旬といい、初旬、中旬、下旬の30日で一月となる。十二の月で36旬、360日、そして卜をしない日を5ないし6日とし、一年（一祀）を365(6)日とした。旬の最後の日（癸）に次旬の帝の行動について卜す。これは定期的なものであり、時々案件により卜すこともあり、良い結果がでなければ、修正して良い結果が出るまで問い直したそうで、膨大な数にのぼり、出土したものでも約16万点にのぼる。その57%が、殷朝34代の内27代の武丁の時代のもので、3000文字くらいあったようで、一字に複数の意味が込められており、昭和21年の当用漢字数1850からすれば、卜することに不自由は無かったことでしょう。

書経の「堯典」によれば、堯という王が「重」と「黎」の二人に命じて天地の通行を遮断させたという。「周」の前が「殷」、その前が「夏」、その前が「舜」、その前が「堯」の世。その以前では、天地の往来ができていた。降は、𠂔と夆とからなるが、この𠂔は阜、足をかける突起のある“はしご”の象。降（くだる）の対となるのが陟（のぼる）で、歩は二つの足跡、𠂔を上向きに並べ、夆は二つの足跡を下向きに並べたもので、ジャックと豆の木のごとく、高い木のようなものを伝って昇降した。

堯の更に前に黄帝という王がおり、炎帝（神農）の子孫の蚩尤（しゅう）と坂泉、涿鹿（たくろく）の野で総力をあげて戦った。蚩尤は銅頭鉄額で霧を吐く連中、魑魅魍魎など山精水怪、苗民を率い、黄帝も四方の神や鬼、熊や虎など野獣を訓練し、下民を率い、地上のみならず天上も戦場となった。まさに天上の諸神、天下の諸鬼、諸精霊、諸民、鳥獣が入り乱れての戦で、これに懲りて、堯は天地の通行を遮断させたという。

夏以前には文字がなく、当時の記録がなく確かなことが分からない。殷や周の時代では、天上は懼れおおいところで、天下、人の住む所とは別世界であった。春秋時代になり周王朝に実権がなくなり、諸侯が各国を統治し、覇権を争う世となり、戦国時代に諸侯が富国強兵を目指し、諸子百家が統治思想を競う世となると、発想が解き放たれ、人が天上を目指すようになる。人が仙人や神になろうとした。孔子の時代の隠者は人で、荘子の時代では、風を吸い露を飲み、雲気に乗って飛竜を御す藐姑射（はこや）の山の神人などがいる。屈原にも、神仙が登場する。山海経には神とも人とも鳥獣魚とも判別しがたい諸々の生き物が登場する。戦国末には、人間も修業すれば神仙になれると、不老不死薬や錬金術、時空を往来する仙人の術が流行し、始皇帝が徐福に不老不死薬を捜させた。道教では、加えて、符を用いて鬼を使ったり、鬼から護身したりする。唐の時代には、仏教が入り、輪廻転生とか極楽、地獄などという話をもたらされ、新たな形で天地往来が復活した。しかし、殷や周、春秋時代では天下のものが天上をめざすようなことはなかった。

平成の人は天上と天下というと、天下は地上、地球で天上は空の彼方、宇宙という別世界をイメージするでしょう。この時代では、天地は、どちらかというコインの裏表の関係、プラスに対するマイナス、電場と磁場のような感覚、磁場の変化が電場に変化をもたらすような相関関係をみていた。天の変動が地を動かし、地の変動が天を動かす。ただ、天が地を主導する関係で、天下の規範は天上からもたらされるという意識があった。

黄帝より以前に、庖羲（伏羲）という王がおり、「仰ぎては象を天に観、俯しては法を地に観、あまねく鳥獣の文と地の宜とを観、近くこれを身に取り、遠くこれを物に取り、始めて八卦を画し、神明の徳に通じ、万物の情を類（五帝本紀）」したとする伝説がある。庖羲は綿密に天地の事象を観察し、身近と見比べて表わす方法を考え、八卦を工夫し、万物の有り方に通じた。また、書契をつくり、嫁娶の制を定め、網を結んで漁することを教え、犠牲を養い、太山で（天を）祀ったともいう。知り得たことを応用し、地上の民が人間らしい暮らし方をできるようにした。栽培すること、家畜化すること、それは天地の働きのお蔭と、収穫したものを卓に盛りつけ、禍福をもたらす天をまつり、禍が去り福の来ることを祈らせた、とでもなるのでしょう。ただ、こういう話は、戦国時代に往古の断片的な伝説を再構成したもので、戦国時代の思想が持ち込まれており、注意するようにと釘がさされる。堯や舜、その前の古帝（庖羲「太皞」、少昊「少皞」、神農「炎帝」、黄帝、顓頊、共工）、あるいは夏王朝の話は、殷や周など自らの文字で記した記録であっても、春秋戦国時代を通じ、あるいは漢代に再構成されたもので、一般人には、どこまでが古伝でどこまでが付加されたものが分からない。ここでは、注意深い祖先が天地に学び、衣食住において、動物とはちがって人らしい生活スタイルを築きあげた、という話にとどめておきましょう。

殷にあっては、上帝は世界の主宰者で天上のみならず地上の生活をも支配した。帝という文字は甲骨文字では、𠩺、左右の脚を中央でしっかりと組み合わせた立派な卓の象で、最高の供物を盛ってまつられる存在を象徴し、それを示（まつ）さまを帝とした。白川氏によれば、「上帝の子孫である王が地上を治めることによって、上下のあらゆる秩序が成り立つのである。特に自然の現象は、帝の支配に属した。農耕に関係の深い雨も風も、すべて帝に祈ることによって秩序が得られた」。また、「帝の支配は、方位神によって四方に伝達される。東西南北の四方に、それぞれ方位を司る神があり、方神という。方神はまた、その地域に神意を伝達宣布するものとして、風神を使役した」、「風は鳥の形にかかれ、鳥は神の使者とされた」とある。方神、風神は豊凶を支配すると考えられ、請雨や農穀の祈りを受けるといふ。卜辞（甲骨文字）の世界と戦国時代に編纂された山海経では名前が異なるが、同じような考え方が踏襲されている。以下の表のような関係にある。

	東方神	風	南方神	風	西方神	風	北方神	風
卜辞	析 (せき)	𠩺 (きょう)	夾 (きょう)	𠩺 (び)	夷	彝 (い)	夂 (えん)	𠩺 (しゅ)
山海経	折丹	俊	因乎 (いんこ)	乎民 (こみん)	石夷	韋 (い)	冕 (えん)	狹 (えん)

また、帝は「直接の輩下に五臣・五工をもつ」とされた。春秋左氏伝、昭公十七年（前525年）条で、少皞（しょうこう）氏が鳥で官名をつけたのは何故かと聞かれ、郟子（たんし）は我が祖のことで承知しているとし、黄帝は雲師で雲の名、炎帝は火、共工氏は水、太皞（庖羲）氏は龍の名で官名つけた、少皞氏は鳳凰が飛来したので鳥で官名をつけ、鳳凰を歴正、玄鳥を司分、伯趙（はくちょう）を司至、青鳥を司啓、丹鳥を司閉、祝鳩（しゅくきゅう）を司徒、睢鳩（しよきゅう）を司馬、鵙鳩（しきゅう）を司空、爽鳩（そうきゅう）を司寇、鶡鳩（こつきゅう）を司事とした、と述べている。

「鳳は天の時を知る、故に以て歴正の官に名づく。玄鳥は燕なり。春分に来り秋分に去るを以ての故に

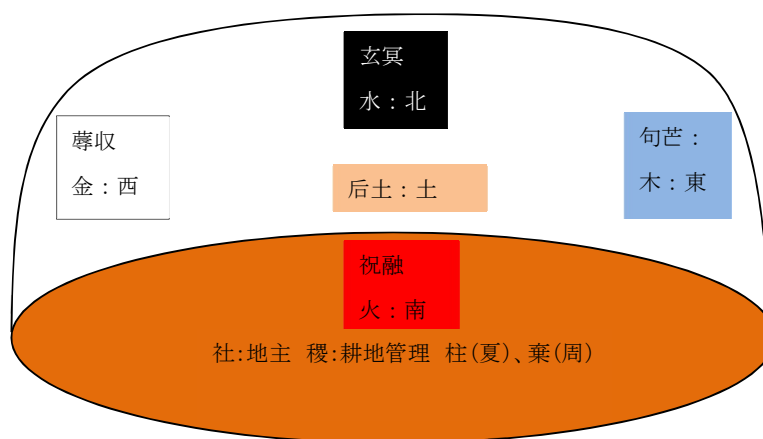
分を司る。伯趙は鵙（モズ）なり。夏至に鳴き冬至に止むを以ての故に至を司る。青鳥は鶇鶇（ウグイス）なり。立春に鳴き立夏に止むを以ての故に啓を司る。丹鳥は鷺雉（キジ）なり。立秋に來り立冬に去るを以ての故に閉を司る。睢鳩は鷲（ワシ、タカ）にして別有り、故に司馬と為りて法制を主る。鴈鳩は平均なり、故に司空と為りて水土を平らかにす。雛鳩（祝鳩）は孝なり、故に司徒と為りて民を教ふるを主る（[埤雅の研究、睢鳩](#)）」とある。時と季節の管理、法制、土木、教育などの役割分担である。

黄帝は雲師で雲、炎帝は火、共工氏は水、太皞（庖羲）氏は龍、少皞氏は鳥の名で官名つけた。					
少皞氏の鳥の 官名と役割	鳳凰：歴正 天の時	玄鳥：司分 春分、秋分	伯趙：司至 夏至、冬至	青鳥：司啓 立春、立夏	丹鳥：司閉 立秋、立冬
	祝鳩：司徒 教育	睢鳩：司馬 法制（軍事を含む）	鴈鳩：司空 土木	爽鳩：司寇 裁判	鶇鳩：司事 農業

五鳩は民を鳩（あつ）める官、五雉は五種の工正の官で、道具を工夫し、規格を定め、民を雉（たいらか）にする官としている。しかしながら時代が下ると、鳥、雲、龍といった遠いものを印とすることができず、身近なものを印とし、長官に司徒、司馬のごとく民に縁のある名をつけるようになったと云う。

木、火、土、金、水の管理に関しては、昭公二十九年（前513年）条に、晋の史官の蔡墨（さいぼく）が、社稷の五祀がどの帝王の五官かと聞かれ、答えたことで一端が分かる。

先の少皞氏に重（ちょう）・該（がい）・修（しゅう）・熙（き）の四弟があり、金・木・水の管理に長じており、重を句芒（こうぼう、木正）に、該を蓐收（じょくしゅう、金正）に・修と熙を玄冥（げんめい、水正）に任命し、少皞氏の政治を助けた。これが三祀。顓頊（せんぎょく）氏の子の犁（り）が祝融（しゅくゆう、火正）、共工氏の子、句龍（こうりゅう）が后土（こうど、土正）で残り二祀。



后土は社（土地神）で、稷は田正（耕地管理者）。夏の時代以前は有烈山（ゆうれつざん）氏の子の柱（ちゅう）が稷に任命されたが、夏が殷により滅ぼされると、周の祖となる棄（き）が稷に任命され、世代交代がみられた。

戦国時代になると、呂氏春秋などでは十二紀（年中行事）として、地上の天子が主人公として祭祀する対象として天上を体系化し、方神の所が帝、風の所が神、鳥の所が蟲となり、陰陽五行説により再編成されてゆく。殷では地上の帝が上帝に卜することでその意を得て運営ができたものの、この殷を倒した周は、上帝の子孫を打倒したことを正当化しなければならなかった。殷の帝は酒や色に溺れ、地上の民の安寧を害したので、天は周に天命を授けて、殷を討たしめた。天命は、民の安寧を図る者、人間に下される

と正当化した。天を祭る人間としての天子のあり方が求められた。天意を知るものとして、卜ではなく易に重きを移した。また、人を人たらしめ、社会生活を社会生活たらしめ、国を国たらしめるものとして、禮(礼)が重要視された。

	帝(方)	神(風)	蟲(鳥)	(「禮記」によるが「呂氏春秋」に準じている)
孟春(立春) 正月 仲春 季春	太皞 東方	句芒 (木)	鱗 (魚類)	青衣■。春を東郊に迎ふ。穀を上帝に祈る。 玄鳥至る。大牢を以て高禩を祠る 天子、鞠衣(黄)を先帝に薦む
孟夏(立夏) 仲夏 日長:夏至 季夏	炎帝 南方	祝融 (火)	羽 (鳥類)	朱衣■。夏を南郊に迎ふ。 有司に、山川・百源を祈祀せしむ。雩(雨乞)。 皇天・上帝・名山・大川・四方の神に共し、宗廟・社稷を祠り、民の為に福を祈る。
土(土用)	黄帝 中央	后土 (土)	倮 (毛羽鱗甲以外)	黄衣■。天子、稷と牛を食ふ。
孟秋(立秋) 仲秋 季秋	少皞 西方	蓐收 (金)	毛 (獸類)	白衣□。秋を西郊に迎ふ。 天子、難(おにやらい)をして秋気を達す。 天子、犬を以て稻を嘗む。
孟冬(立冬) 仲冬 日短:冬至 季冬	顓頊 北方	玄冥 (水)	介 (貝類)	黒衣■。冬を北郊に迎ふ。天子、来年を天宗に祈る。 有司に、四海の大川・名源・淵澤・井泉を祈祀せしむ。 山川の祀、及び帝の大臣、天の神祇を畢ふ。

禮は、説文解字では、「神に事(つか)へて福を致す所以なり」とある。甲骨文字では、示と豊からなり、「豊」は醴酒(れいしゅ、一夜酒、にぎり酒)のこと。酒の初文は酉、酒樽の象、これを寸(手)でもって捧げることを尊という。「酉」は人と神を媒介するものでもあった。「禮の初といふものは、これ、飲食に始まる。燔(や)いた牲肉、黍(きび)の醸酒、七体に割いた豚、酒甕に溜めたにぎり酒を供へ、手ですくって飲み、土を運び木組をして設けた壇の土を敲(たた)き固めて歌う。かようなことでも、鬼神に敬(つつ)しんで仕へることになる(禮運)」と祭りの儀式が「豊」の起源であった。孔子は、「かの禮、それは、先王が天の道を継承し、それにより人の情を治めるものである。故に、これを失へば死に、これを得れば生きる。詩に曰ふ、『鼠にも人と同じく身体がある。人と生まれて禮が無い(身体だけが有る、鼠なみだな)。人として禮が無いとするなら、どうして遄(すみやか)に死なぬことがあろうか、(いやすでに死んだも同然)。』だから、かの禮とは、必ず天にその本があり、地に倣(なら)ふ。鬼神をこの世と分け、牲で清めて祭り、死者を哀哭して喪し、祖先や祖神、山川の神に犠牲を供えて祭り、弓矢を射、馬車を御し、成人に冠し、目合はわせて昏し、朝日を迎え、政務を行ひ、人を聘すは、禮により達することができる。故に聖人は、禮によりその方法を示し、故に天下国家を正すことができる(禮運)」と弟子に説明したとされる。禮もずいぶんと進化していた。

ここでおさらいをしておこう。天上には中央に主宰者がおり、東西南北の四方に意を受けて治めるものがおり、鳥を使者にしている。この主宰者は臣や官があり、時や季節、風や雲や雨、いわゆる木・

火・土・金・水などを管理し、教育、法制（軍事を含む）、土木、裁判、農事を司っている。雷光も神を代表するものではなく、雷神と限定されてゆく。当初は、神は中央の主宰者を祭ること、祀は四方や風や雲や木・火・土・金・水などの管理者を祭ること、社は土地、稷は耕地管理者を祭り、祖は祖先を祭るものであったようだ。

問題は、祭る者と祭られる対象との関係である。地上の誰でもが神を祭るものではない。神を祭ることができるのは、地上の帝あるいは天子のみに許された。四方や風などを祀することができるのも地上の帝あるいは天子であった。祖を祭るものは子孫であり、社を祭るものは諸侯であった。

論語の八佾篇には、魯の大夫である季氏が泰山に旅すことを、季氏の宰であった孔子の弟子の冉有が止めなかったことを孔子が歎いている。旅すとは旅して泰山を祭ることで、泰山を祭るとは天子の祭祀であり、諸侯、ましてや大夫が行うならば僭越至極、孔子には正気の沙汰とは思えないのであるが、それをまかりとおす世相があった。つまり、祭る方がどんどん変化し、神とか祀の意味が変質、多様化していた。

神社というは、本来は、祭られるものと祭るものの相応しい関係がないなら成立しない。論語の雍也篇に、「鬼神を敬して遠ざく」とある。この場合の鬼神は、自分が祭るべきでない祖霊や神であり、敬意を表するが祭ることはしないという配慮である。孔子は、このような心構えで対応することを求めたが、周王朝の王権がゆらぎ、諸侯が覇者となり、大夫が下剋上で政権を奪取する、あるいは財力のあるものが主家を押しのけて、主家が行えなくなった祭祀を代行する、そういうことが祭祀をゆがめた。

夏の稷であった「柱」が周の「棄」にとってかわられるごとく、勝利者の祖先、祖神が天上界においても格が上がる、そういう祖先、祖神も持たない者が政権を取れば、絶えていたような祖先、祖神をかたりなりすます、あるいは神を変質させ多くの崇敬を受けるような存在にする、などということが起こる。あるいは、役割を終えて消えるものもある。崇敬されない神は、票の入らない政治家と同じで、神界で影響力を失う。我が国においても、奴国とか邪馬台国の神々が天の中心におられたはずであるが、もはや行方が定かではないがごときものである。

さて、神様のことは一休みして、仏様に移ろう。

仏様

仏の旧字では佛である。漢字であるが、サンスクリットの बुद्ध、buddha の音を漢字の近い音、佛陀をあてたもので、「説文解字」で起源を辿ることはできない。ところで佛は、人と弗からなる。弗は縦の木を並べて巻きつけた形で、「もとる」「はらふ」「あらず」、播、祓、不、勿にも通用し、人に弗(あら)ず、と読めるところは絶妙である。己の業を滅し、輪廻を止め、人に生まれ変わる事のない解脱を完成させたことに鑑みれば、よくぞ適切な字をあてたものと感服する。

サンスクリットは表音文字で記される。口蓋、歯、舌、唇、鼻、喉、呼吸で作り出す子音や母音を記号化し、組み合わせて音を定める。イラン系のアーリア人が持ち込んだインドヨーロッパ語の系統である。文字そのものに漢字のような表意機能はない。漢字では樂で名詞、動詞、形容詞を兼ね融通無碍であり、yuè なら音楽の樂(名詞)、yào なら好む(動詞)、lè なら楽しむ(動詞)、楽しい(形容詞)と音で分かることもあるが、大概是文脈で判断する。サンスクリットでは、vid(動詞:知る)→veda(名詞:知識)→vaidyā(形容詞:知識ある)と母音と語尾変化で動詞、名詞、形容詞が決まる。

名詞には男性・女性・中性の別があり、形容詞もそれに合せて語尾変化する。単数(1)・両数(2)・複数(3以上)の別がある、英語で複数にはsを付けるようなものだ(例外も多いが)。両数と複数を分けると、男女二人なのか他に誰かがいるのかたちどころに分かる。代名詞では、英語のように he, she, it と男性・女性・中性で変化し、複数なら they であるが、サンスクリットでは、両数と複数の別がありよりはっきりする。英語なら I(主格) my(所有格) me(目的格) と三つの格であるが、サンスクリットでは、主格・対格・具格・為格・従格・属格・処格・呼格の別がある。これに単数・両数・複数と男性・女性・中性の別があり、これらの変化形を間違いなく覚えろなどといわれれば、ぞっとする。

動詞には、能動態・反射態・受動態があり、時制については、現在・過去・アオリスト(単純アオリスト、sアオリスト)・完了(重複完了、複合完了)・未来(単純未来、複合未来)・条件法がある。また、法には、直説・願望・祈願・命令・接続の各法があり、それ以外に使役動詞・意欲動詞・強意動詞・不定詞・絶対詞・分詞が動詞に付随するという。能動態・反射態は他人のためにすることと自分のためにすることの区別らしく、過去は話者が目撃した過去、アオリストはその日の過去、完了は話者が目撃していない過去、複合完了とは、英語でいうところの have+過去分詞のごときものだが、行為の結果が現在まで残るといっているものではない([まんどろーかのサンスクリット・ページ](#)) とある。筆者は、不案内であるが、物事を非常に精緻に特定し、独自の時制で時間関係を整理し、直接体験したことと伝聞は区別し、思いをどのような相手にどのような態度で発し、どのような強制力をもつのかで区別し、論理を追求し、組み立てるような言語とみうけた。

佛陀は、サンスクリットで「気づく、理解する、悟る、目覚める」などを意味する動詞 bodhati の過去分詞で、「悟った、目覚めた」などの意味という。覚者という漢字は、釈迦を念頭において、覚った者とみなされるが、元来は、覚が既になされたことか、今なされることか、なされる見込みがあることかは前後の文脈をみなければ分からない。しかし過去分詞であれば、話者はそのことを目撃はしていないが、既になされてしまっていたこととなる。釈迦族の王子として生まれた人、ガウタマ・シッダールタ(गौतमसिद्धार्थ;Gautama Siddhārtha)、パーリ語では、ゴータマ・シッダッタ;Gotama Siddhattha、は覚ったことで buddha と呼ばれた。覚る前は、buddha ではない。では当時、誰がシッダッタを覚者と認定できたで

あろうか？覚者とする基準があったのか？人が仏となるとはどういうことか？キリスト教徒であれば、シッダッタは仏の子か？などと問うであろう。

シッダッタの生誕年は正確には分らない。「アショーカ王（在位紀元前 268 年頃 - 紀元前 232 年頃）が即位後 20 年を経て、自らここに来て祭りを行った。ここでブッダ釈迦牟尼が誕生されたからである」と刻まれた石柱が発見され、釈迦牟尼の存在が確認されたが、パーリ語による資料、スリランカの「島史」と「大史」は、アショーカ王を仏滅後 218 年、中国に伝わる仏典「十八部論」「部執異論」は、アショーカ王を仏滅後 116 年とし、100 年の差がある。孔子の頃、あるいはソクラテスの頃の人となる。コーサラ国の属国、カピラ国で王子として誕生、文武に秀でた青年で、妻子に恵まれ国を継ぐことを期待されていたが、人生に悩み、29 歳の時に、出家したとされる。

インドには、カースト制度がある。インドの原住民はドラヴィダ人、紀元前 13 世紀頃、イラン系のアーリア人が原住民を支配し、カースト制度を敷いた。アーリアとは「高貴な」という意味である。彼らもたらした「ヴェーダ *veda*」とは、神の息から生じたもの、神聖なもので、ひとつひとつのことばをマントラ (*mantra*) という。ヴェーダはすべてがマントラとなる。それらは、古代のリシ (*ṛṣi*; 聖賢) 達が神から聴きとったもの、「シュルティ *śruti*」、とされ、口伝で継承された。動詞語根 $\sqrt{śru}$ 、聞くからくるもので、オクターブを 22 個 (22 個のシュルティ 近藤貴夫、大歓喜) に分割した音で聴きとられたそう。ことばには音の高さ長さ抑揚があり、目つきやしぐさもつきもので、文字が開発されたとしても、文字で表現できることには限りがある。文字化せねば伝えられない事態を迎えたのは 14 世紀後半という。 $\sqrt{\quad}$ は語根 (*root*) の記号。口伝を不確かなものとするのは、近代人の偏見である。ヴェーダも時とともに膨大なものとなり、三つの部分、「リグ (*ṛig*: 称える)・ヴェーダ」、「サーマ (*sāma*: 詠じる)・ヴェーダ」、「ヤジュル (*yajur*: 祭式の)・ヴェーダ」にわけそれぞれの継承者を定め、後に呪法や占などの要素をもつ「アタルヴァ (*atharva*)・ヴェーダ」が加えられた。

「リグ・ヴェーダ」によれば、巨大な原人プルシャ (*puruṣa*) がバラバラにされ、世界が生まれたとされる。頭から天、足から地、へそから大気、耳から方位、心臓から月、目から太陽、口からインドラ (雷)、とアグニ (火)、呼吸からヴェーユ (風) が生じた。また、口の部分がバラモンとなり、両腕がラーjanya (クシャトリヤ) となり、両腿がヴァイシャとなり、両足はシュードラとなった、という。バラモンは僧侶、クシャトリヤは王族・武人、ヴァイシャは庶民、シュードラは隷民であり、シッダッタはクシャトリヤの階級の人であった。

さて、世界には死ぬ (\sqrt{mr}) ものと、死なぬ (*amr*) ものがある。a がつくると反対の意味になる。太陽や月や雷・・・不死かどうかは分からないが寿命がとてつもなく永いものがあり、他方一瞬のものもある。人は死ぬ。シャクティ (*śakti*; 力) の威力の差でしょうか。シャクティは、 $\sqrt{śak}$ (できる) の過去分詞 *śakta* (できた) の女性形という。輝く (*div*) シャクティをもつものは天部 (*deva loka*) におられる。人は死ぬと月にゆき、雨となり地に戻り、植物に入り穀物になり、それを食べる男の精子となり、上に衝動力あり下に展開力あり、子宮に入り、振動により、シャクティが活性化し胎児となり、生まれかわるという。サンサーラ (*samsāra*)、生と死を繰り返すことで輪廻という。よき行いをするひとはバラモンに生まれ変わり、よき行いをしないものはどんどん下層に、そして動物にすら生まれ変わる。

ヴェーダの世界では、デーヴァ (*deva*) アスラ (*asuras*) に分かれ、デーヴァは人々から祭祀を受け、

それと引き換えに恩恵をもたらす存在、スーリヤ（太陽）、パルジャニヤ（雨）等々自然を象徴するものであるが、一番崇敬されたのはインドラ（雷）でリグ・ヴェーダのマントラの四分の一はインドラを称えるものである。アスラは、天体の運行や自然界の秩序など天則（リタ；*ṛta*）を守護し、乱すものに懲罰を下すもので、ヴァルナ（*varṇa*）が代表格である。インドラ（雷）がデーヴァの代表格で、デーヴァが漢訳仏典で「天部、天、天人、天神、天部神」とされたようで、中国で稲光の象「申」が神の初文であったのも無関係でないかもしれない。多神の世界で、神は人間の姿をしている。ただ、全体を統括するような神はいない。彼等は原住民との間でカーストを設け、バラモンを最上層としたが、専制的な君主を持たなかったようで、神々の世界もそれを反映していたのかもしれない。「神々は人間の願望を実現する力を備えた存在と見なされた。祭式は、そのような神々に供物を捧げ、賛歌を唱え、神々の好意を得ることによって、その力を発揮してもらい、願望が成就されることを願って行われた。祭火は供物を天上の神々に届ける使者として神聖視され、火神アグニとして尊ばれた（[インド思想史略説：野沢正信](#)）」という。

彼等は、家庭にあつては、家長を祭主とし、供物を供えて、平安と繁栄を祈る。その祭式は日常生活を律する規範となり、仕草とことばが口伝で子に継承された。部族にあつては、戸外に祭壇を設けて、部族の有力者を祭主とし、祭官に祭式を行わせ、戦勝、子孫繁栄、降雨、豊作、長寿とそれぞれに相応しい力を発揮する神を祭り、その祭式において部族内の秩序や役割が定められ、社会規範となり、祭官によって様式やことばが口伝され子孫に継承された。古代中国での上帝や帝の祭りとは様相を異とし、むしろ、日本人が熱田神宮に戦勝祈願やお稲荷さんに商売繁盛を祈願する方が近いようにみえる。しかし、祭式が違った。

「リグ・ヴェーダ」により祭祀する神のマントラをホトリ祭官が称える。日本の祝詞（のりと）は神に奏上することばであるが、マントラは神のことばである。祭官の唱えるマントラに、参列する人が感応しなければ効力が発揮されない、口先だけで唱えたり、ことばだけを聞いているようでは、ご利益はないそうである。「サーマ・ヴェーダ」はマントラの朗詠である。リグ・ヴェーダは4音の音階だが、サーマ・ヴェーダは7音が使われる。「本文（歌詞）の上に、ルビのように、これらの音位を表す数字と、音長を表す文字を振って旋律を記す（[移動サの用語集](#) 近藤貴夫、大歓喜）」。声明に比されるが能の謡のごとく魂を揺さぶる迫力があるのかもしれない、場合によれば舞踊があるのではなからうか。それをとりしきるのがウドギートリ祭官ということか。日本の神楽のごとく静かでゆったりしたものではなからう、インド人の歌と舞踊好みは中途半端じゃなく、官能的である。「ヤジュル・ヴェーダ」を唱え祭式を進めるというから、何が行われ、祭主や参列者がとるべき行動などを伝える役割があり、供物を祭火に投げ入れる役目をするのもアドヴァルユ祭官。全体の進行を統括しているのが、ブラフマン祭官という。「アタルヴァ・ヴェーダ」はアタルヴァンという名のリシ（聖賢）が、悪と困難を回避することを教え、様々なヨーガにより達したというから、悪心を押さえ善行をすすめるような呪法と儀式により祭場を祓い、清浄を保ったのですかね。

ところが半農半牧の社会と都市生活を行う社会では、物事のあり方が変わってしまっている。分業や交易が促進され、人の知恵や技術が開発され、都市を運営するには、生産力、税金、土木、軍事、裁判等々、人間集団の組織力を強化する仕組みが必要となる。それを発揮させる個人の能力がクローズアップされ、人が何をできるのかを考えるようになる。多くの事象を一般化し、原則を見出す、あるいは、ある前提から結果を導くなど、因果関係を見出し、論理を組み立てる。ヴェーダや仏教のことは門外漢であるが、ト

ライしてみよう。

人が世界を認識する、そこには、世界を認識する主体がある。人はその五感、喜怒哀楽、思考力で認識した世界を現実と思う。しかし、現実と思っているものは、そう見えているだけで、つきつめてゆくと目にはみえない元素の世界に至る。近代科学でも、人間は有機物で、臓器や神経、骨、筋肉、脂肪、皮膚、毛などという組織からなり、組織は細胞、細胞は高分子からなり、高分子は分子の結合したもので、分子は元素の結合したもので、元素は陽子と電子の結合で、これらは素粒子が結合したもので、素粒子はクォークの結合したものであるという具合で、見ることも、触れることもできない根源なるものにゆきつく。それをプラクリティ (prakṛti) という。

モミを播くと、土と雨と太陽の作用により芽を出し、茎や葉が育ち、稲となりモミを付ける。形は変化するがそこに一貫してこの変化を起こさせる主体がある。モミにあるシャクティ (力) が働き芽になり、茎・葉・モミになってゆくが主体そのものは変化することはない。それをプルシャという。もはや人間の姿をした巨大原人プルシャではなく抽象化されたものである。それを宇宙レベルで総称したものがブラフマン (brahman)、個別に稲にやどっているものをアートマン (ātman) とする。モミが発芽しないことも、葉や茎が枯れたり病原菌にやられたり、食われたり、洪水でやられることもがあっても、シャクティが活動を止めたにすぎず、稲のアートマンには何の変化も無いと考える。太陽には太陽のアートマン、月には月のアートマンがあり、プラクリティをシャクティにより結合して太陽や月となるようなイメージであろうか、このアートマンはプルシアに通じている。

人には生きようとする本能、五感があり、喜怒哀楽、思考力がある、感覚やマナ (心) の働きが有るために、本能的なもの、潜在的なもの、感じているもの、あるいは喜んだり怒ったりしているもの、あるいは思考しているものを自分とする。本能のおびえがあり、死ぬことを恐れ、失う事を哀しみ、思い通りにならないと怒り、うまくゆけば喜ぶ、息をし、見たり・聞いたり・触ったり・臭ったり、味わったりしているものが自分とする。これらの行為をカルマ (karma) という。カルマは、クリ √kri (する) からくるもので、生きることはクリの連鎖であり、カルマがカルマを誘発する。自らの行為の結果は自らに戻ってくる、自業自得の連鎖であり、あなたはそれに埋没する。しかし、稲のアートマンのごとく、あなたのアートマンは、感じ、喜怒哀楽、思考するあなたのカルマの連鎖をみている本来の主体という。この主体にたちもどることを実現する方法を体系化する思想の流れがあった。

シッダッタは出家した。国や家を運営するため、富や地位や家族、世俗のことに没頭すれば、自身をふりかえることができなくなる。精神を集中し、己のカルマに向きあうには出家することが避けられない。シッダッタは出家し、カピラ国のはるか南、当時最大の強国、マガダ国の首都ラージャガハ (王舎城) を目指した。都市化が進み、宇宙の理法を体系的に思考するような人々が現れ、思考する人間を養う経済的な余裕もあいまって、優秀な人材が王都に流入していた。

シッダッタは、「神々の恩恵を求めるといよりは、神々を祭式によって操作することにより願望が実現される」「神々は、祭場に呼び出され、そこで唱えられる聖句のもつ呪力によって支配される (インド思想史略説：野沢正信)」といった方向転換をする最高学府でもある僧侶階級バラモン (婆羅門) の門を叩かなかった。婆羅門 (ブラーフマナ) に対し沙門 (シュラマナ、努める人々、修行者) と呼ばれる托鉢をしながら郊外で自由に求道する修業者達がいた。ジャイナ教のマハーヴィーラをはじめプーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、アジタ・ケーサカンバリン、パクダ・カッチャーヤナ、ニガンタ・ナータプッタ、サンジャ

ヤ・ベラッティプッタというような思想家達が、シュラマナの群れの中から現れた。

シッダッタは、そういう修行者の一人、アーラーラ・カーラーマ (Ālāra Kālāma) に弟子入りした。アーラーラ仙人と記されるが、仙人という概念は中国人のもので、神仙思想の仙人にあたとみて付記したものであろう。喜怒哀楽は心の安定をゆるがせ、欲を刺激する感覚器官の働きに心が奪われれば精神を集中させることができない。散乱しがちの心や感覚器官をつなぎとめ、統御することをヨーガ *yoga* (つなぎとめる) という。そのめざすところは、瞑想による三昧 (*samādhi* 、サマーディ) とされ、思考や感情や欲望の作用を止滅 (*nirodha* 、ニローダ) させることという。シッダッタは、その境地を習得したが、これでは解脱 (*mokṣa* 、モークシャ) に至らないとされ、ここを出られた。モークシャとは矢を射るとか解放するという意味で、サンサーラ、生と死を繰り返すことから解放されることをいう。

次に弟子入りされたのを、ウッダカ・ラーマプッタ (Uddaka Rāma-putta) という。 *putta* というのは～の子供の意味で、ラーマの子、ラーマ・ジュニアみたいなものか。アーラーラが説く境地を無所有処といい、ウッダカが説く境地を非想非非想処という。処はここでは境地、無所有という境地と非想非非想という境地。無所有が我という意識を止滅する境地とすれば、非想とは世界を想うこと (*sanna*) をしない、しないこともしない境地、思考や感情や欲望はもとより、世界を認識する器官の作用すら止滅する、殴られて吹っ飛んでも、痛みを感じない、「心頭滅却すれば火もまた涼し」の境地とでもいえばいいのか、まあ、普通の人間にはあり得ない。シッダッタは、その境地を習得したが、これでも解脱 *mokṣa* に至らないと、ここを出られた。

そうして挑まれたのが苦行 *tapas* である。 *tapas* は熱力からくるそうで、修業によって熱力をえることができるので苦行が *tapas* とも称されたという。断食・不眠・呼吸停止などを修業すれば、正常を越えた力が得られると考えられていた。人間の本能的な機能を止滅する。シッダッタは、食欲、呼吸の止滅など、死の恐怖と対峙した。

断食をすすめると、「その小食のためにわたしの肢節節は、草の節のようになった。その小食のためにわたしの臀部は駱駝の足のようになった。その小食のためにわたしの脊柱は紡錘の連鎖のように凹凸有るものとなった。その小食のために、譬えば老朽家屋の垂木が腐食し破れているように、わたしの肋骨は腐食し破れてしまった。その小食のために、譬えば深い井戸における水の光が深くくぼんで見えるように、わたしの眼窩における瞳の光は深くくぼんで見えた。その小食のために、譬えば生のうちに切り取られた苦い瓢箪が風や熱によって皺よって萎縮してしまうように、わたしの頭皮も皺よって萎縮してしまった。そこでわたしは、腹皮に触れようとする、脊柱をとらえてしまい、脊柱に触れようとする、腹皮をとらえてしまった。その小食のために、わたしの腹皮なるものは、脊柱に密着してしまった。さてわたしは、その小食によって、『わたしは糞をしよう』あるいは『尿をしよう』と思って、その場で頭を前にして倒れてしまった。そこでわたしはこの身体をいたわりつつ、掌で肢体を按摩した。すると、わたしが掌で肢体を按摩したときに、その小食のために、わが身毛は腐食したその根とともに、身体から脱落した」(ゴータマ・ブッダ 釈尊の生涯 中村元) とありすぎまじい。栄養失調を通り越し、これでどうして生きていられるのか、誰か支える者がいなければ生存はおぼつくまい。同じ苦行者が五人いたとのことであるが、全員この状態では互いに支えることはできない。死にかけている人を連れ出し、世話するような人たちがいたのではなかろうか？

呼吸を深く、ゆっくりとし、最後は口と鼻での呼吸を停止する、その結果、なんども仮死状態に陥ったという。悪魔、ナムチ (*namchi*) がシッダッタを誘惑したり、脅したり、取引をもちかけたりする話は、

死に瀕する器官の悲鳴というか苦痛がおどろしい幻影となって、潜在下の意識に襲いかかったことを反映したのではあるまいか。数年続いたというこの苦行も解脱 *mokṣa* をもたらすことがなかった。

シッダッタは、苦行林をあとにしてウルヴェーラー村に向かい、河で沐浴して体のよごれをきれいに落とし、村の牛飼いの娘スジャーターが差しだした滋養あふれる乳粥を食して、衰えきっていた体力を回復し（6～7年の苦行期間とされるが、先の苦行がそんな永い期間どうして続けられたのか？その後河で沐浴する体力があったのか？疑問がある、歩くこともならず息絶え絶えに救助されたのではないか？）・・・ネーランジャラー河の岸辺に立つアシュバッタの大樹の下に坐り、禪定 (*dhyāna*、ディヤーナ)に入り・・・ある暁に、明けの明星を見ながら、ついに、目覚めた人、ブッダとなり、解脱の境地、涅槃 (*nirvāṇa*、ニルヴァーナ) に到達した、とある。*dhyāna* は、*√dhyai*、すなわち沈思黙考する動作を表現する動詞語根から派生した行為名詞、心を定めるという意味があり、禪定と漢訳された。*nirvāṇa* の *nir* は打消語、*vā* は吹く、*ṇa* は過去受動分詞を作る接尾語で「吹かれないこと」、あるいは「吹き消された状態」、もろもろのカルマが消されてしまった状態という。

ところが、「苦勞してわたしがさとり得たことを、今説く必要があろうか。貪りと憎しみにとりつかれた人々が、この真理をさとすることは容易ではない。これは世の流れに逆らい、微妙であり、深遠で見がたく、微細であるから、欲を貪り闇黒に覆われた人々は見ることができないのだ」と説法することは無理と判断されたようである。猫に小判、豚に真珠、馬の耳に念仏ということになろうか。

ヘーロドスによれば、「トラキア人はみな自らの意志で死ぬことに敬意を払い、中には、死者の魂が減ることなく生存中よりも一層祝福されると信じるものもいた。・・・インド人について人口の最も多いトラキア人の、このような生と死というきわめて興味深い問題に対する価値観は、彼らの文化のいたるところに顕在することになる。彼らの建てた建造物の構造にはその思想が、死後の世界への魂の移行という概念と相まって特徴的に表れるのである。トラキア人の残した最も印象深い建造物が、トゥムルス（墳丘）で覆われた葬祭建造物であるということは決して偶然のことではない（[トラキア人と魂の不滅](#)）」という。トラキア人は、生まれる事を悲しみ、肉体は魂の牢獄であり、死ぬことを祝福したといわれ、このような社会に住む人々なら、シッダッタの説くことは受け容れられたかもしれない。

シッダッタは自らさとりを得たと宣言されたとあるが、そのことが分かる人はいないと自覚しておられるなら、無駄なことである。世の流れに逆らうようなことをさとったシッダッタを誰がブッダと認定できたか理解に苦しむ。シッダッタが如何なる心の変化で説法に向かわれたかも分からない。梵天がブッダに説法することを懇請されたという話が残されているが、後世に付加されたことであろう。

凡夫の常識からすれば、説法を恐れたのは、正しく理解されないと分かっていたからであろう。正しく伝わらない、誤って伝えられる、それが独り歩きし、とりかえしのつかない害を及ぼすことにすらなりかねない。アインシュタインの見出した知見は、人類の世界認識をすばらしく革新したが、原子エネルギーの利用はさまざまな被爆被害をもたらし、軍事への利用は、爆弾となって人類破滅の恐怖を現実にするのみならず、広島や長崎に投下され、一瞬にして多くの人々を殺傷し、そして、永きにわたる後遺症をももたらした。すばらしい知見というコインの表が福なら裏には禍が潜んでいる。シッダッタが、自ら見出した知見の将来をどう観想されたかわからないが、おそれを懐かれたのであろう。しかし、説法に踏み切られた。そここのところが分からない。

シッダッタは、人を見て法を説かれた。その人に分かるような喩え話を多用された。苦行者の聴きとつ

たこと、哲学する人達が聴きとったこと、王族が聴きとったこと、庶人とさまざまな人たちが聴きとったことが、口伝され、文字化されることになる。ヴェーダの世界の人々は、シッダッタの頃には多様な哲学思考をする人々を生みだして居り、弟子達はそれらの哲学や思想との論争にさらされ正当化せざるをえなく、己の学派が引き継ぐ教えの誤謬を取り除き練り直し体系化を図った。シッダッタが教理体系として語らなかつたことが教理体系として構築され、経・律・論の三種の仏典となる。経とは教理、ダルマの内容であり、律は戒律、僧団での生活規定および諸規則であり、論はダルマの解釈である。この三つが三蔵、唐の時代に玄奘がインドを訪れ、持ち帰り、中国語に翻訳された。

こういう経緯をみると、筆者には、シッダッタのさとられた内容は分からないが、①ヴェーダの世界のごとく、マントラによりデーヴァの力を得る、あるいは、デーヴァの力を統御するということではない、②思考、感情、感覚、本能の働きを止滅すれば、アートマンに合一し、本来の主体に還ることができるというものでもない、③苦行を極めればカルマを消し去ることができるというものでもない、とされた過程は分かる。デーヴァを拜むとか、超人的な修業により超人的な力を獲得するというものではない。その人のもつ悪しき認識を去り、悪しき行為から遠ざかるように説法された、となろうか。

仏様や仏像を拜んで功德を授けてもらう、仏の力を頼むということはバラモンのでブッダの教えとは異なる。お経を呪文のごとく唱えてみても、ヴェーダのマントラを唱えるようなもので、これもブッダの教えとは異なる。己の宗派こそがブッダの教えを正しく継承するものと他の宗派を攻撃し戦いになるなら、これもブッダの教えとは異なる。こうなることをお見透しのうえで、ブッダが説法する決心をなされたものか？そこは分からない。

では、このへんで仏様も一服して、稲尾様にゆこう。

稲尾様

伝説のプレーヤーというサイトに、稲尾和久投手についてこう記されている。

「1937年大分県生まれ。投手。右投右打。背番号24。別府緑ヶ丘高校から1956年西鉄ライオンズに入団。

1年目からいきなり21勝6敗、防御率1.06で最優秀防御率のタイトルを獲得。新人王にも選ばれた。西鉄もリーグ優勝を果たし、日本シリーズも制した。

2年目の1957年には35勝6敗、防御率1.37という完璧な成績で最多勝と最優秀防御率のタイトルを手にした。チームも日本シリーズ2連覇。

1958年にも33勝、防御率1.42で2年連続最多勝・最優秀防御率のタイトルに加えて334奪三振で奪三振王にも輝いた。チームも日本シリーズ3連覇を果たしたが、稲尾はこのシリーズでチームが3連敗したあと、4連投4連勝という奇跡的な快投を演じた。

1961年には78試合に登板し、スタルヒンが作った日本記録と並ぶシーズン42勝を挙げて、防御率1.69、353奪三振で最多勝・最優秀防御率・奪三振王に輝いた。

1963年にも28勝16敗、226奪三振で最多勝と奪三振王に輝いてチームをリーグ優勝に導いている。

しかし、過酷な登板日程により、肩を酷使したことで実働年数は14年と短く、1969年に現役引退。

「鉄腕」と呼ばれるタフネスぶりで、日本シリーズ4連投4連勝に象徴されるように、文句も言わずに投げ続けた。

145キロを超えるストレートと鋭いカーブなどで、勝負球から逆算して配球を組み立てていく頭脳的なピッチングとコントロールで打者を翻弄した。」

神様、仏様、稲尾様と称された経緯については、同サイトによれば、

「1958年10月11日に西鉄×巨人の日本シリーズが行われた。

西鉄のエース稲尾は、5日前から原因不明の高熱に冒されていた。開幕前夜に平熱に戻ったものの、第1戦は、4回3失点で降板。結局2-9で敗れて負け投手となった。

第2戦も落とした西鉄は、第3戦の先発に稲尾を立てたが、惜しくも巨人藤田元司投手に完封され0-1の敗戦。

3連敗で後がなくなった西鉄は、第4戦も稲尾を先発に立てた。稲尾は、10安打を浴びながらも4失点で何とか6-4で勝利を手にした。

第5戦は、3回終了時点で0-3と圧倒的に不利な中で稲尾は登板。好投を続けるうちに味方打線が3点を奪って追いつき、延長戦へ。

10回裏、稲尾が自らサヨナラ本塁打を放って2勝目を手にした。

連投をしているうちに調子が戻ってきた稲尾は、第6戦も好投し2-0の3安打完封で3勝目を挙げた。

そして、第7戦、稲尾は、8回まで無失点に抑え、9回に長嶋茂雄にランニング本塁打を浴びたものの、1失点完投で見事日本一となった。

世間は『神様、仏様、稲尾様』と呼んで賞賛した」とある。

日本には、「苦しい時の神頼み」、「地獄で仏」という言葉がある。また、「仏の顔も三度まで」ともいう。三度までが限度で、いかな仏といえども、四度目はもうお聞き届けになるまいということである。この日

本シリーズの西鉄の監督は三原であった。三連敗した監督は、もはや敗戦を覚悟して、誰が投げれば負けてもファンが納得してくれるかを考えて、稲尾投手を指名した。すでに三戦中の二戦を投げている投手に四戦目も投げさせるというのは、仏の顔も三度までというが、高校野球でありえてもプロ野球ではない。稲尾投手はそれに応えた。足腰や腕が強靱であったのは、漁師の父を手伝って毎日船の魯を漕いでいたからという。

五戦目にもリードされてからの登板となった。まさに、苦しい時の神頼み。投げるのみならず自らホームランを放つての勝利となれば、これは「神風」が吹いたようなものである。六戦、七戦にもとなれば、「地獄に仏」である。さすがに最後には握力が効かず、サイン確認のためマウンドに行ったキャッチャーの前で、ボールが手から落ち、キャッチャーがさりげなく拾ったという。後年、病床で三原監督が「自分の都合で君に4連投を強いて申し訳ない」と詫びると、稲尾は「当時は投げられるだけで嬉しかった」と答えたと伝えられている。当時はそうだが今なら・・・

稲尾投手は、この時、まさに神様であり仏様であった。カール・ルイスであれば、イエス様がルイス様に力を発揮させ神の栄光を示されたとするかもしれない、モハメド・アリであれば、アッラーがアリを鼓舞して力を見せしめたとするかもしれない。しかし、稲尾投手に神や仏が乗り移ったとか、力を与えたとは云わない。困ったことを頼まれた神様のごとく、仏でさえ三度で断るようなことを嫌な顔をせずとめられたことを称賛したものである。このような無謀を断行された監督、稲尾投手、二人を突き動かしていたものは、ファンの期待に応えるという強い思いであったろう。だが、このような無理がたたって、9年目には肩の故障で6試合の登板で1勝もあげられなく、11年目からはリリーフ投手に転向し、14年目に引退せざるをえなくなった。

日本で漢字が広範囲に使われるようになるのは万葉の時代であった。中国から書物が入ってくる頃には、中国では、殷の時代それ以前の神などは過去の彼方であり、人間の王朝の史書や政治思想・法制や天文書・人文諸芸の書などが中心であった。中国の神様の消息はすでにわからず、日本の神様は、その威力にさらされることはなかったようにみえる。ただ、数千年くらい前となれば、インドや中央アジア、中国や日本の神様は同じようなルーツをもっていたのかもしれない。

天照大神は、古事記では伊邪那岐命の左目から生まれたとされる。天照大神は太陽神であり、ヴェエダにおいて、プルシアの目から太陽（神）が生まれたという伝承に共通し、古い伝承によるものと思える。日本書紀では伊弉諾尊と伊弉冉尊から生まれたとされ、両親（神）がはっきりしており、より人間の歴史に近い伝承によっている。

王朝が変遷すると、新たな王朝が旧王朝を倒したことを正当化するために、旧王朝の祖神が排除されたり、悪神、邪神化されたりする。あるいは原住民を征服した民族が、原住民の神を地下や黄泉、あるいはランクの低い野蛮な神のような扱いをすることになる。

我が国においても、奴国とか邪馬台国の神々の消息はよくわからない。大国主命（おほくにぬしのみこと）のことからは記録に残されている。大国主命はさまざまな名がある。大国主神（おほくにぬしのかみ）、大物主神（おほものぬしのかみ）、国作大己貴命（くにつくりのおほあなむちのみこと）、葦原醜男（あしはらのしこを）、八千戈神（やちほこのかみ）、大国玉神（おほくにたまのかみ）、顯国玉神（うつしくにたまのかみ）とも云いその子（みこ）凡そ一百八十一神といわれた。少彦名命（すくなびこなのみこと）と力を合わせて、葦原中国（あしはらなかつくに）を平定したのであるが、その様は、通常の武力平定とはイメージが遠い。人々や家畜の

病を治し、鳥獸昆虫の災いを祓って平定した。

「天下（あめのした）を經營（つく）る。復（また）顯見蒼生（うつしきあをひとくさ）及び畜産（けもの）の爲（ため）は、其の病（やまひ）を療（をさ）むる方（みち）を定む。又、鳥獸（とりけだもの）・昆虫（はふむし）の災異（わざはひ）を攘（はら）はむが爲は、其の禁厭（まじなひや）むる法（のり）を定む（日本書紀）」。

ところが、少彦名命が常世国に去ってしまい、いまだ平定されないところを一人で平定し、残された出雲国までやってきて、こう申された。岩石草木に至るまで強暴であったものをことごとく打ち砕き説き伏せ葦原中国を平定したが、誰か一緒に治めてくれるものはないのか。

「夫れ葦原中国は、本より荒芒（あら）びたり、磐石草木（いはくさき）に至及（いた）るまでに、咸（ことごと）に能く強暴（あしか）る。然れども吾已に摧（くだ）き伏（ふせ）て、不和順（まつろ）はずといふこと莫（な）し」「今此の国を理（をさ）むるは、唯し吾一身のみなり。其れ吾と共に天下（あめのした）を理（をさ）むべき者、蓋し有りや」。また、「かの地（くに）多くの螢火かがやく神及び蠅聲（さばへ）なす邪し神、また、草木ことごとくよくものいふことあり（日本書紀）」ともある。

すると、神（あや）しき光が海を照らし、忽然と浮き来るものがあつた。それは大国主神の幸魂（さきみたま）、奇魂（くしみたま）であると云い、大国主命が分かった、ではどこに住みたいかという、「やまと」の三諸山といったので、そこに宮（最古の宮）を造つた。これを三輪の大物主神という。大国主神の魂には海の向こうからの魂がある。日本の神様には和魂（にきみたま）と荒魂（あらみたま）があり、怒ったり戦ったりされるのが荒魂である。和魂は幸魂と奇魂からなるとする考えがあり、大物主神を大国主神の和魂ともいう（四つを別々とすることもある）。かくて、大国主神と大物主神を中心として、葦原中国（天下）を治める体制ができ、天下の神々を国神（くにつかみ）と云つた。

これに対して、高天原の神々を天神（あまつかみ）と云う。高天原では、天照大神と高皇産靈尊（たかみむすひのみこと）が天照大神の子、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊（まさかあかつかはやひあまのおしほのみこと）と高皇産靈尊の女（むすめ）梶幡千千姫（たくはたちぢひめ）の間の子の天津彦彦火瓊瓊杵尊（あまつひこひこほのにぎのみこと）、いわゆる瓊瓊杵尊（にぎのみこと）を葦原中国の主を立てようとされた。その交渉に天忍穗耳尊の弟、天穗日命（あまのほひのみこと）やその子を大国主神の下に派遣するが、大国主神に取り込まれてそれぞれ三年たつても帰つてこない。このような難しいことに取り組むのが高皇産靈尊であつた。“むすひ”の機能を持つ神であり、プラクリティをシャクティにより結合するヴェーダの世界と無縁でないかもしれない。天国玉（あまつくにたま）の子、天稚彦（あめわかひこ）を派遣すると、顯国玉（うつしくにたま）の女（むすめ）下照姫（したでるひめ）を娶り、大国主神と共に葦原中国を治める始末となつた。

高皇産靈尊は事態を打開するために、經津主神（ふつぬしのかみ）に武甕槌神（たけみかづちのかみ）を配して派遣する、この両神はいわゆる威厳のある稲光と雷の神である。ヴェーダの世界であればインドラであるが、我が国では天照大神の方が上位である。この二神は、出雲国五十田狹（いたさ）の小汀（をはま）に降りて、十握劔（とつかのつるぎ）を抜き地に逆しまに突き立て、その劔先に腰をかけ、大国主神に高皇産靈尊の意向を伝え、返答を迫つた。

大国主神は、我が子の意見を聞いてからにしたいと慎重な対応をなされた。予知能力に優れた事代主神は父の言葉を聞き、従わざるを得なくなると国を去つた。大国主神も国譲りをして国を去つた。建御名方神（たけみなかたのかみ）は父に従わず、武甕槌神と力比べをし、驚いて逃げ出し、諏訪に追い込まれた。邪神（あしきかみ）及草木石類、星神の香香背男（かかせを）が服さなかつたが、平定されてしまう。邪神の

中身が分からないが、古い時代の神々が含まれていよう。

大国主神はこの二神は代理であり、高皇産靈尊と直接交渉をしたとする伝承もある。葦原中国の統治については、顯界と幽界の区別があった。両者の間で、顯界と幽界の統治に関する棲み分けが行われた。顯界（政治）を皇孫、瓊瓊杵尊が主宰し、大国主神が幽界（神事）を主宰することになった。天神はそのために、大国主神に高く太い柱、広く厚い板の宮、神田を用意し、空や海を巡る船と棧橋を造り、祭祀者を定め、天神と国神の協力体制を構築した。そして皇孫が葦原中国で政權に就くまで、大物主神に国神を率いしめ、その後も皇孫を永く護ることを約せしめ、高皇産靈尊の女（むすめ）、三穗津姫（みほつひめ）を大物主神に配（あは）せた。

「今は、汝（大国主命）の言ふ所を聞くに、深くその理あり。故に更に條しこれを勅す。それ汝治す所の顯露の事、これ吾孫（皇孫）これを治す宜し。汝したがいて神事を治すべし。また、汝応じ住む天日隅宮、今まさに供し造らむ。すなはち、千尋の梶繩をもって百八十紐をなし、その宮を造る制は、柱すなはち高く太く、板すなはち広く厚く。また、まさに田を供し造らむ。また、汝、往来し海に遊ぶそなえ、高橋、浮橋そして天鳥船を造る。また、天安河において、打橋を造り、百八十縫の白楯を供し造り、また、まさに汝を主り祭祀は天穗日命、これなり」。「汝（大物主神）、もし国神をもって妻となすは、吾なお汝に疏し心有りと謂ふ。故に今吾が女、三穗津姫をもって汝に配せ妻と爲す。宜しく八十萬神を領み、永に皇孫の爲に護り奉るべし。すなはち、還してこれを降らしむ（日本書紀）」。

そして、天照大神が勅し、皇孫を降ろされた。

「葦原千五百秋の瑞穂国、これ吾子孫、王とすべき地なり。宜しく爾、皇孫、就きて治せ。行くませ。寶祚の隆、まさに天壤に無窮を与へる者ならむ（日本書紀）」。

高皇産靈尊は、困った時に智恵と力を尽くされるが、事がなれば決して前面に立たずに、天照大神におでましをいただく。我が国の国生みをされた神を伊弉諾尊と伊弉冉尊という。そういう神は創造神として最高位におかれるのが通常の神話であろう。しかしながら、伊弉冉尊は火の神を生んだ時、女陰を焼かれて黄泉の国の住人となられた。伊弉諾尊が迎えにくるのが遅れ、黄泉のものを食べてしまわれ、汚れたとして、黄泉の国から出ることができなくなってしまわれた。火を人間にもたらすという最大の貢献をされたがために、人から崇敬されるどころか、汚れ恐れられる存在に貶められてしまわれた。ギリシア神話で人間に火をもたらしたプロメテウスが悲惨な運命を背負ったようなものである。伊弉諾尊も結局は淡路にひっそりとお隠れになった。淡路（あはち）とは“会いにくい”という意味をもっている。

乱暴者として有名な素戔鳴尊は、父母がこのような悲惨な状況にあるにかかわらず、なんら面倒をみることなく、神々しく祭り上げられている姉の天照大神に怒りをぶつけざるをえなかった。母の伊弉冉尊に会いたいと泣き続け、乱暴狼藉をして姉に訴えたが追放されてしまう。父母や弟の悲惨な運命を背負い、神々しくあらねばならないのが天照大神のお立場である。日本の神様が恩恵をもたらされたり、怒って疫病をもたらされたり、力を発揮されることに変わりはないが、神話のエキスはそこではない。功績あるものが悲惨な運命を辿ることがある、同胞であろうとなかろうとそれに巻き込まれて辛酸をなめる事変も起こる。身内からも批判者がでる、それでも、神々しいものを傷つけることなく立てて、結束をはからんとする行動様式である。大国主命の国譲りの記憶も、江戸幕府の徳川慶喜が大政奉還を行ったことと無縁ではない。これだけはブチ壊してはいけないという了解のごときものがある。

また、天照大神の宮である伊勢神宮参拝は、元来は、皇孫たる皇族のみがなさるべきものである。中国では、祭るべきものと祭られるものの関係を乱すことは、忌むべきものであった。我が国では応仁の乱による国の乱れに病んだときに、お伊勢参りなる運動が起こり、それは以降も続き領主が困り、各地で伊勢

参りができる大神宮を造るなど、庶民がお伊勢さんと称してお参りすることがいつの間にかあたりまえの事のようになされるようになった。誰の家の神棚に天照大神の札があっておかしくない時代を迎えている。孔子がご覧になれば、目をむいて嘆息されようか？祭政一致の王朝の時代から国民主権の民主主義国の時代に至っても天皇家を存続させ続けるこの国ならではの現象である。

稲尾投手は西鉄ライオンズのファンのみならず稲尾ではなくなっていた。日本プロ野球ファンの稲尾になられた。この稲尾の続投は、2013年、楽天の田中将大投手の日本シリーズの最終戦での最終回登板で再び脚光を浴びた。前日160球を完投した投手が登板を買って出た。100球、中4日でのローテーションの時代の野球である。投手出身の星野監督は、本当か（投げるのか）？と聞くと、「はい」という。大丈夫かと聞くと、「はい」という。本当に大丈夫かと念を押すと、「はい」という。これは監督の前後の対策を考えた大人の演出であろう。

好投していた美馬を6回で則本に交代させ、則本が7・8回を無得点で抑えたことで、9回に田中を起用せざるを得なくなることは目に見えていた。震災に苦しむ東北の人々に仙台をホームグラウンドとする楽天イーグルスの野球選手が何をできるのか？野球の底力をみせると公言したチームである、日本一になることで東北の人々に勇気を与えるとファンと一丸となってその実現の一手手前まで来ていた。投手としてその原動力となった則本、田中が最後を締めることは、楽天ファンの熱望にとどまらなかった。

則本も田中も監督も、やらねば大きな悔が残ったであろう。田中の起用は、二死一・三塁という大ピンチを招き、最後の打者はこのシリーズでホームランを放っていた。ハラハラ、ドキドキしたのはファンのみではない。結果は、スプリットを多用したバッテリーがこの打者を三振にしとめた。球場に歓喜が爆発した。日本人はこういう時に野球の神様を感じる。前日、このシーズン負けなしという偉業を成し遂げてきた田中で勝ちを決めるはずであった。神様は田中に黒星を用意されていた。負け投手でありながら160球で九回を完投したのは翌日の投手への負担を減らすためのエースの意地であった。これで十分役割は果たしていた。このリベンジを最終回に果たしたい気持ちは分かるが、現実には危険な登板であり、打ち込まれており失点する可能性も高かった。稲尾様のご加護があったのかもしれない。野球の常識よりファンの期待に動かされていたとって過言でなかろう。野球の神様がこの後、田中投手にどのような運命を用意されているかは、神のみぞ知るところである。柏手（かしわで）。

我が国に仏教が導入されたのは、百済経由であり、蘇我氏が中核となった。仏教といっても、仏像と比丘尼がスタートであり、シッダッタの教えとはほど遠い。元来、仏像とか仏典はなかった。アレクサンダー大王のインド遠征（BC326-323）とともにもたらされたギリシアの彫刻や文献の影響による。ギリシア人は神話も政治的・哲学的な対話、科学的な考察もテキスト化して流布させた。そして、ポリスを運営する人間の力を前面に押し出した。

紀元前2世紀後半になると、ミリンダ王として知られるアフガニスタン・インド北部を支配したギリシャ人であるインド・グreek朝の王メナンドロス1世は、比丘ナーガセーナとの問答を記録させた。「ミリンダ王の問い」として残っている。ギリシア人なら、かくのごとくして、その教えそのものに迫ることが出来た。中国人は、玄奘の持ち帰った仏典を漢訳して、その教えを諸子百家の思想と比較すること

ができた。我が国では、聖徳太子が三経義疏（『勝鬘経義疏』『維摩経義疏』『法華義疏』）を著すという時代（推古天皇御世7世紀初め）までは、「教え」とはほど遠いものであった。

欽明天皇六年（545年）に百済の聖明王が使者を派遣して、仏像をプレゼントされた。仏像を造ると功德「のりのわざ」がある。天皇は徳「いきほひ」をえる。福祐「さいはひ」は海外の官家にまで及ぶ。天下の人々が解脱「やすらか」になるというのが能書きであった。

「丈六（ぢやうろく）の佛像（ほとけのみかた）を造りまつる。願文（ことねがひのふみ）を製（つく）りて曰（のたま）ふ、『蓋し聞く、丈六の佛を造りたてまつる功德（のりのわざ）甚大なり。今敬ひて造りたてまつりぬ。此の功德を以て、願はくは、天皇、勝善（すぐ）れたる徳（みいきほひ）を獲たまひて、天皇の所用（しろし）めす、彌移居（みやけ）の国、俱（とも）に福祐（さいはひ）を蒙らむ。又願はくは、普（あまねく）天の下は一切衆生、皆解脱（やすらかなること）を蒙らむ。故に造りたてまつる』（日本書紀）。

同十三年（545年）に、百済王は釈迦仏の金銅像と幡蓋若干と経論若干を献上された。そして、最勝王経についてこれが最高で、中国の周公、孔子も知らなかったもので、解り難く入り難いが、会得すれば隨意宝（何でも意のままになる宝）である。釈迦が東方にまで流布させようとなさったものであると使者に説明させた。天皇は歓喜されたが、群臣に意見を聴かれた。蘇我稲目は日本（やまと、日本書紀では「大和」という言葉は使用されず、日本を「やまと」とする）のみ敬わないわけにはゆかないと述べた。物部尾輿、中臣鎌子等は、我が国の百八十神は怒りたまうと反対した。天皇は稲目に試しに拝ませた。向原の家を寺として安置して拝むと、疫病で多くが死んだ。物部尾輿、中臣鎌子等は投げ捨てるよう勧告し、結局、難波の堀江に流し捨て、向原の伽藍に火を放ち焼き尽くした。このとき、天に風雲もないといふに、磯城嶋金刺宮の大殿から出火した。

翌年に茅渟海（泉南）で雷のような音がして光るものがあり、捜すと樟木が浮かんでおり、これを天皇に献上すると、天皇は仏像二体を造らせ、今の吉野寺に奉納させた。

敏達天皇の時代になると、仏教文化の導入の要素が強くなる。六年（577年）に、百済王は、経論若干巻の外に律師・禅師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工、六人を獻っており、仏像のみでなく寺を作り、その運営者、僧などを置くことをセットとされた。十三年（577年）には、蘇我馬子は寺の運営を図るために、尼僧（比丘尼）に目を付けた。それが、なんと11歳の女子他2名というからおそれいる。そして、比丘尼の法明に通じていた高句麗の恵便を捜し出し、自らの邸宅の東に仏殿を造り、石の弥勒菩薩像を安置し、礼拝させた。この時、仏舍利が馬子に献上されたが、何のことか分からず、鉄の金床に舍利を置いて、鉄の鎚で打つと、金床と鎚が砕け、舍利は損われなかった。水に投げ入れ、浮かべと思ふと浮かび、沈めと思ふと沈んだ、これはかの隨意宝と思つたのだろう。馬子が入信する決定的動機となったようだ。舍利は釈尊の遺灰のことである。

翌年に馬子は、塔を大野丘の北に起て、舍利を塔の柱頭に藏め、その下で大會を執り行った。ところが九日後に馬子は病を得、占うと、父の稲目の時、難波の堀江に流し棄てられた仏神の祟りということで、天皇がその仏神を祭祀せよということで、馬子が弥勒石像を礼拝すると、再び疫病が起り多くが死んだ。

物部守屋と中臣勝海等は、仏舍利のある塔を石斧で倒し、寺に火を放ち、仏像、仏殿を焼いた。焼け残った仏像を難波へ運び、前回と同じく堀江に捨て、海に流し去った。雲が無く、雨が降った。三人の比丘尼も三衣を奪はれ、捕縛され、人々の集まる海石榴市の駅舎で尻や肩を鞭うたれた。

用明天皇の御世になると、仏法（ほとけのみち）と神道（かみのみち）という語が用いられた。崇峻天皇の時に、蘇我氏と物部・中臣氏とが激突する。これに参戦した少年の厩戸皇子（後の聖徳太子）は、木で四天王の像を作り頭髮に置き、敵に勝たしめたまわば、四天王の寺塔を建てると願をかけ、馬子も諸天王、大神王等が我を守護して勝たしめたまわば、諸天と大神王とのために、寺塔を建て、三宝を流布させると願をかけた。この戦に勝利し、太子は四天王寺を馬子は法興寺を建立することになる。

推古天皇の元年（593年）に、百済は仏の舍利、僧、律師（聆照・令威・惠衆・惠宿・道嚴・令開等）、寺の全体的な構成、各建築物の構造を設計できる人材である寺工（太良未太・文賈古子）、塔の相輪を制作する技術者である鑪盤博士（將徳白味淳）、瓦博士（麻奈文奴・陽貴文・倭貴文・昔麻帝彌）、画工（白加）を送り込んできた。蘇我氏は今までに見たことのないような壮大な寺院を飛鳥の地に現出させ、あらたな時代の到来を示す者としての位置を確立せんとした。

翌年には、天皇は、三宝（仏、法、僧）を重んじ、君や親のために寺を造ることを詔された。三年には百済に研修に行っていた比丘尼が帰国し、馬子はかつての向原寺に出家させた比丘尼を集め尼寺とし、いよいよ本格的な僧寺の建設に入る。仏教導入には、三宝、これを受け入れる寺院が必要であるが、これを私寺から官寺へと転換することは容易ではない。半島では、土着信仰に結び付けられ王家が仏教を導入したようであるが、我が国では天孫の王であり、崇敬する神々がおられ、蘇我氏は最有力であっても一豪族である。新羅のごとく、王が釈迦の化身というわけにはまいらない。我が国では、“おほきみ”が天皇、太子を仏の化身とする方向に動いた。

我が国においては、仏法と神道の間の論争というものがあった。シダッタという人、その人の教えには思いが至らず、仏像に象徴される西の国、西蕃からやってきた神、仏神とみなした。日本の神には和魂とか荒魂とかがあった。“たま”、玉、かつての勾玉の玉、日本（やまと）の神の“たま”と西蕃からやってきた神の“たま”のどちらにより「いきほひ（功德）」があるかが問題であった。現実世界では、仏を奉じる蘇我氏が神々を奉じる物部・中臣氏に勝った、金銅の仏像や壮大な寺院は、宮建築を凌駕するものがあつた。

この“たま”の世界レベルで仏教に理解をしめされたのが、聖徳太子であつた。推古天皇二十九年（621年）に太子が亡くなり、太子の師であつた高句麗の僧、慧慈（ゑじ）は、太子を日本（やまと）に生まれ出られた聖、三宝を恭しみ敬い、民の厄を救う聖とし、その死を悲しんだ。慧慈は、自分も死して浄土で会い、生まれ変わって、共に衆生を浄土に導くであろうと述べたという。

「日本国（やまとのくに）に聖人（ひじり）有（ま）す。上宮豊聡耳皇子（かみつみやのとよとみのみこ）と曰す。固（まこと）に天（あめ）に縦（ゆる）されたり。玄（はるか）なる聖の徳（いきほひ）を以て、日本国に生（あ）れませり。三統（きみのみち）を苞（つつ）み貫（ぬ）きて先聖（さきのひじり）の宏猷（おほきなるのり）に纂（つ）ぎ、三宝を恭（つつ）しみ敬（あやま）ひて、黎元（おほみたから）の厄（たしなみ）を救う。是（これ）実（まこと）の大聖（おほきひじり）なり。今太子（ひつぎのみこ）既に薨（かむさり）りましぬ。我、国異（け）なりと雖も、心断金（うるはしき）に在り。其れ独り生くとも、何の益（しるし）かあらむ。我来年（こむとし）の二月（きさらぎ）五日（いつかのひ）を以て必ず死（みまか）らむ。因りて上宮太子に浄土（じやうど）で遇（まうあ）ひて、共に衆生（しうじやう）を化（わた）さん（日本書紀）」。

太子伝暦によれば、太子は死に際して妃に、自分は今まで中国の衡山で法華経を学び修行を重ね、五度生まれ変わり、東海に仏法を伝播するためにここに生まれ出た、今が六回目で、いよいよ七回目を迎へよ

うとしていると語ったという。この話は天台宗を開いた智顛（智者大師）の師、慧思（515年 - 577年）の転生伝説と結びつけられたものである。山岳信仰五岳の一つ南岳、衡山で577年慧思は六十三で亡くなった。『大唐国衡州衡山道場积思禅师七代記』によれば、慧思（思師禅师）は、俗姓が李氏、515年南像州（河南省）の武津に生まれ15歳で出家し、法華三昧（成仏の修行法）を悟り、衡山に至ったのであるが、実は前世で衡山で修行をしており、これが六回目の転生（晋朝の許氏、宋朝の崔氏、齐朝の李氏、梁朝の韓氏、陳朝の駱氏、周朝の姚氏）であったという。太子は、三十六歳の時に、「法華義疏」を著述する上で、伝来している法華経の誤りを正すために、小野妹子に前世で衡山で所持していた法華経を持ち帰ることを依頼したとする。

太子等が著した三経義疏には高い評価が寄せられている。『東アジアにおける「三経義疏」の流伝(HP)』において、王勇教授は、「聖徳太子の著作とされる『三経義疏』（すなわち『勝鬘経義疏』『維摩経義疏』『法華義疏』の三書）は、中国南朝仏教の研究成果を基礎とし、朝鮮学僧の協力を得て完成された。そのうち、『法華義疏』と『勝鬘経義疏』は、ブックロードによって海外に輸出されている。唐僧明空はこの『勝鬘経義疏』を読み、その大義をまとめ、注釈を施した『勝鬘経義疏私鈔』を著わしているが、これは唐代中日書籍交流における一つの大きな成果となっている。このような漢字を媒介とした書物の広域伝播と相互影響は、シルクロードには見られない光景である」としておられる。

太子を仏の化身とすることは、我が国のみならず、半島や大陸にも流布された。しかしながら、このような動きは、太子一族に悲惨な未来をもたらした。

推古天皇の後継については、蘇我馬子の権勢について蘇我氏の出である推古天皇にも目に余るものがあった。馬子の子である蝦夷はそのことを懸念し、推古天皇の意中が田村皇子にあると察し、この方向で群臣をまとめようとした。ところが馬子の弟の境部摩理勢は、蘇我氏の血を引く太子の子、山背大兄を後継とするのが当然と、蘇我氏の中でも孤立するほど公然と蝦夷に反対をした。あまりのことで蝦夷も摩理勢を討たざるをえなくなり、摩理勢は太子の子で山背大兄を推す泊瀬王の所に逃げ込んだ。ところが、泊瀬王が急死され、摩理勢父子は討たれ、田村皇子が後継者とされた、舒明天皇である。

舒明天皇の九年（637年）に、蝦夷が反乱を起こした。何故反乱し、平定されどういふ処分をされたかが何も記されていない妙な事件であった。蝦夷は、次期政権でも大臣の地位にあり、失脚したものではないが、舒明天皇の後継者選定には関与出来なかったとみえる。蝦夷に代ってその子が入鹿が頭角を現してきていた。経緯が不明であるが、再婚で舒明天皇の皇后となられた宝皇女が即位された。皇極天皇である。

皇極天皇と蝦夷大臣の間はうまくゆかず、国政が停滞気味となり、入鹿は、蝦夷を蚊帳の外において、上宮の王等を廃し、舒明天皇と法提郎媛（馬子の女「むすめ」）の子、古人大兄を天皇にして実権を掌握をせんとした。上宮の王等とは、蘇我氏の横暴を唱えた上宮大娘姫王と表立っては自制をしている山背大兄王である。古人大兄が本来天皇であるべきとする勢力があり、入鹿はそれを取り込んだ。入鹿は巨勢徳太、土師娑婆等に斑鳩を襲わせ、山背大兄等は山中に逃れた。家臣が東国に逃れて再起を図ることを助言したが、山背大兄は心を決めておられた。言う通りであるが、自分のために万民が父母を失うことがあってはならない。戦いに勝つだけが丈夫（ますらお）ではない、身を捨てて国が固まるなら、これも丈夫であると、死を選ばれた。

「卿が善（い）ふ所の如くならば、其の勝たむこと必ず然らむ。但し吾が情に冀（ねがはく）は、十年百姓を役（つか）

はじ。一の身の故を以て、豈（あに）万民を煩勞（わずら）はしめむや。又後世に、民の吾が故に由りて、己が父母を喪せりと言はむことを欲（ほ）りせじ。豈其れ戦ひ勝ちて後に、方に丈夫と言はむや。夫れ身を損てて国を固めば、亦丈夫にあらずや（日本書紀）。

聖徳太子は、『勝鬘經義疏』の注釈に、「捨命と捨身とは皆是れ死なり。但し意を建つこと異なるのみ。若し身を餓虎に投ずるが如きは、本捨身に在り、若し義士の危うきを見て命を授すは、意は捨命に在り」としておられる。上宮聖徳太子傳補闕記によれば、「吾は五濁の身を捨て、八逆の臣に施」すとあり、捨身を実行されたと当時の人々はみなしたのだろう。蝦夷は入鹿の行動を深く憂慮したという。

この入鹿を外国の使者を迎える儀式の最中に殺したのが、舒明天皇と宝皇女の子、中大兄皇子であった。中臣鎌足が行動を共にし、彼等を庇護し、力をつけさせたのが蘇我倉山田石川麻呂、馬子の子、倉麻呂の子であり、入鹿とは従兄であった。皇極天皇はこの事件に仰天され殿中に消えてしまわれた。後継者候補は中大兄皇子、古人大兄と皇極天皇（宝皇女）の弟軽皇子であった。鎌足は中大兄皇子に自重を求め、古人大兄は出家され、軽皇子が即位された、幸徳天皇である。

理由はつまびらかでないが、後に石川麻呂の関係者は中大兄によって肅正される。石川麻呂の弟（日向、又は身刺）が、兄が謀反を企んでいると讒訴し、石川麻呂の一族は追い込まれて、山田寺で自害をした。その様はこう記された。

『夫れ人の臣たる者、安ぞ君に逆ふることを構へむ。何ぞ父に孝（したが）ふことを失はむ。凡そ此の伽藍（てら）は、元より自身の故に造れるに非ず。天皇の奉爲（おほみため）に誓ひて作れるなり。今我身刺（むさし）に讒（しこ）ぢられて、横（よこしま）に誅（ころ）されむことを恐る。聊（いささか）に望はくは、黄泉にも尚忠（ただ）しきことを懷きて退（まか）らむ。寺に来つる所以は、終の時を易からしめむとなり』といふ。言ひ畢（をは）りて、仏殿の戸を開き、仰ぎて誓を發てて曰く、『願はくは我、生々世々に、君王を怨みじ』といふ。誓ひ訖（をは）りて、自ら経（わな）きて死せぬ。妻子の死ぬるに殉（したが）ふ者八（やつたり）（日本書紀）。

謀反の意志はなかった。中大兄皇子の妃であった石川麻呂の女（むすめ）、蘇我遠智娘（造媛）は心の傷むあまり亡くなられた。二人の間の子の建王は物を言うことができず、八歳で亡くなった。

中大兄皇子は奈良に遷都すると、皇祖母尊となった母の皇極天皇や重臣を引き連れ、幸徳天皇を難波に置き去りにする。自分の妹であり幸徳天皇の皇后である間人皇后をすら連れ去った。幸徳天皇は難波で亡くなられたが、中大兄皇子には衆望がなく、皇祖母尊となられた母が再度即位され、斉明天皇という。中大兄皇子は、今度は、石川麻呂を讒訴した日向の弟、赤兄を用い、幸徳天皇の子、有間皇子に謀反の企てをさせ、処刑した。

どこまでが史実で、どこまで後世に作られたストーリーかは判然としない。母であった斉明天皇（宝皇女）は天皇に即位させたい我が子、中大兄皇子の行動に憂慮されていたことであろう、孫の建王を亡くされたとき、尋常の悲しみようではなかった。

馬子が少女を比丘尼として寺の運営を始めたことに驚かされたが、推古天皇と斉明天皇との二人の女性天皇が、孟蘭盆会（うらんぼんのをがみ）をお始めになられたことも感慨深い。後に宮中の女官が漢字と仮名まじりの文学をはじめると、新しいものを取り入れ、順応し、こなされるさまは真似のできるものではない。

仏説孟蘭盆經に、「年七月十五日に、当に孝慈憶を以て、生む所の父母、孟蘭盆を為し作り、仏及僧に施し、以て父母、長く養ふ慈愛の恩に報ひ」とある。神通力のある釈迦の弟子、目連尊者（マハーモウガ

ラーナ)が、亡くなった母を透視すると飢餓道で苦しんでいた。鉢に飯を盛って供え、母は左手で鉢を持ち、右手で飯を食べようとするが、口に入れる前に、火炭と化し食べることができない。泣いて釈迦に助力を求めた。釈迦は、母の罪根深く一人の力では無理で、「十方の衆僧が、七月十五日に、僧自恣の時(僧たちが自ら懺悔を行なう会)に当りて、七世の父母、及び現在の父母で、厄難中の者の為に、飯百味、五果、汲灌盆器、香油、錠燭、床敷、臥具を具へ、世の甘美を尽し、以て盆中に著きて、十方大徳衆僧に供養」せよと助言す。「此の盂蘭盆が、現在の父母、及び七世父母に至りて救度す」と目連尊者が喜んだ、というものである。現在の苦しみを救うには、七世に及び供物をし、大徳ある僧を集め供養せねばならないという考え方がもたらされた。

日本人は神々の住む高天原、人の住む葦原中国、死者の住む黄泉の国という世界にいた。高天原は必ずしも天空とは限らず、人のゆかない高原であってよかった。葦原中国は「多くの螢火かがやく神及び蠅聲(さばへ)なす邪し神、また、(岩石)草木ことごとくよくものいふ」世界であり、顕界と幽界があり、黄泉の国は地下であろうが、その国の食を食べなければ、戻ることもできず、その入り口となる坂や洞窟があった。

生きもののみならず岩石草木に至り“たま”、玉、魂があり、ことばにも“ことだま、言霊”があるとされた。大国主命の幸魂、奇魂が海の向こうからやってきたように、季節に応じて、“たま”がやってきた。田の神であったり、海の神や山の神、祖先の霊であり、それをお迎えして、田や海や山の恵みや子孫の安寧を願って供物や舞や樂を供し、お見送りをしていた。

余談だが、草木はともかくも岩石に“たま”ありというのは合理精神世界の人には迷信をこえて野蛮未開の領域となる。1973年の工業デザイナーの国際会議で梅棹忠夫氏がテーマの **Soul and Material World** を我が国では **Soul of Material World** と考えると述べられると会場がどよめいた。魂と物体とは別物であり、粘土で人形をつくり魂、霊、スピリットを吹きこまれたのが人である。これが抜け出ればただの物体に還る。輪廻もこの一環であり、物体は焼くのが衛生的であるが、鳥につつかれようが犬に食われようが魂が抜け出た以上あまり気にしない。また抜け出た魂は生まれ変わるものであり、墓というものはない。

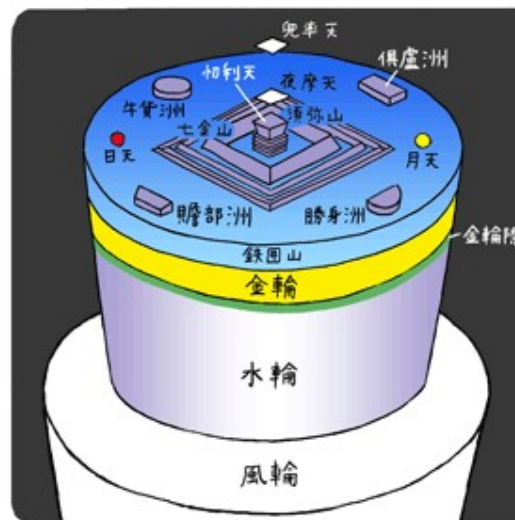
我が国では、墓に葬られない死者は幽霊、怨霊となって子孫を呪いかねないと粗末に扱ってはならないもので、厚く葬ることが求められた。中国では宗廟をつくり位牌を並べるのであるが、祖先が多くなると中には害をもたらしたものと功の優れたものがあり、この順番をどうするかで結構もめたようである。我が国では何代かすぎればご先祖様という“たま”に溶け込んでゆくようで、遠いご先祖は誰それと区別することなくお迎えして、お見送りすることができた。

そこに西の方から仏という神がやってきた。よくわからないが仏像のようなもので、人は生まれ変わるといふ。あの厩戸皇子(聖徳太子)は中国の偉い僧の生まれかわりらしく、もともとは西の国、天竺の仏で、東の国の衆生を救うために、何度も生まれかわり、中国にまできておられたという。

聖徳太子の子、山背大兄は戦に勝つことより、衆生を傷つけることを恐れ、殺されることを選ばれた、それは今ばかりではなく、来世のことを慮られたようだ。太子が生まれ変わって衆生を救おうとされたごとく、山背大兄も殺傷を忌まれた。石川麻呂はおそらく仏に救いを求めて山田寺で自害されたのであろう。この世で人を殺してでも勝つことは、あの世で目連尊者の母のような苦しみを得ることになる。そういう者を救うには七世に及び、徳のある僧を集めて供養しなければならない。さもなくばその人は成仏できなくなる。

齊明天皇は、奄美に漂着した観貨邏（とから、吐火羅）国の男女を招き、7月15日に孟蘭盆会を行い、庭の須弥山をみせた。観貨邏人は中央アジアからインドを南下し、船を操り東南アジア、中国、日本にまで交易を行った人々である。また、多くの仏教僧を輩出していた。仏教の本場の孟蘭盆会の行事、須弥山の構造について意見を求められたのであろう。

金輪の世界の広がりや太陽系くらいとされますから、古人には想像もつかないくらい広い。瞻部（ぜんぶ）洲が人の住むところ。洲はだいたい地球くらいのサイズで、深さ八万由旬（56万km）の塩水の海に突き出た島のようなもので、その下に巨大で深い地獄がある。地獄には層があり、一番下を無間地獄という。中央にある巨大な山が須弥山で高さが八万由旬というとてつもない高さで、頂上の方が有頂天、悟りの一歩手前の者の住むところ。甘露の雨が降り空腹することがない。四方を四天王が守護している。太陽や月は須弥山の中腹を回っている。須弥山の回りを七つの方形の山脈が囲んでおり、それが金でできており七金山という神々しさである。八つの功德水のあるところ。七金山を越えると浄土の世界に向かうのであろう。



須弥山宇宙像 (いい仏壇 より)

仏の世界は須弥山の中腹以上にある。修業というか悟りのランクで欲界、色界、無色界の別がある。欲界は、喜怒哀楽を離れているがまだ男女の別があるランク、須弥山の中腹から有頂天までで地居天といい、それを離れた上が空居天で少しランクが上がる。色界は性欲、食欲を離れた世界で四つの段階があり禪天という。無色界は天といい、四処あり最上の手前がかのアーララの説いた無所有処、最上がウツダカの説いた非想非非想処という。

齊明天皇がそういうことに関心がおありになったかは分からない。しかし、須弥山をなぞった庭で、天と地と地下の構造とその広さについて、また、孟蘭盆会においては、浄土と地獄のありようについて観貨邏人に質問をされたことであろう。

齊明天皇は、孫の建王の霊が天に昇っていないのではないかと心痛された。

今城（いまき）なる 小丘（をむれ）が上（うへ）に 雲（くも）だにも 著（しる）くし立（たた）たば 何（なに）か 歎（なげ）かむ（日本書紀）

今城の小丘とは建王を殞（もがり）した今木の乎武列岳であろう。その上に、雲すらない。死せる者の霊が天に昇る、それを示す雲が見えない。はっきりと雲がのぼれば、何をか歎くことがあろう。何かが崇って天に昇れていないのではないかと不憫でならない。建王を成仏させてやりたい、本気で孟蘭盆会をなされたと思う。供養されねばならない人々の群れが、天皇にはみえたであろう。

成仏とは、出家して修行を重ね悟りを啓くことであり、お経はその教えであるが、我が国では、お経を呪文のごとく唱えて、死んだ人を迷わずあの世に送る、あるいは地獄で苦しむ死者を救い出すようなことを成仏させるとみなしてきた。また、いつの間にか、死んだ人そのものを“ほとけさん”と称するよう

にもなった。“ほとけさん”になってしまえば、生前敵と味方で争っていたとしても、厚く葬り供養することが人の道とされた。また、山背大兄のような人を仏のような人とみなした。入鹿や中大兄皇子などは鬼のような人にみえたことであろう。

この世とあの世の境目におられるのがお地藏様。地藏は、仏陀でなく菩薩であるが、六道の入り口におられ、三悪道（地獄道、餓鬼道、畜生道）に落ちないように、三善道（修羅道、人間道、天道）に導く役割である。サンスクリット語では *kṣitigarbha* という。*kṣiti* は大地 *garbha* は子宮で、包蔵とされ、地藏と訳されたが、元来は地母神であり、インドでは日本でのような人気はなかった。我が国では、塞（さえ）の神、幸いの神・歳（とし）の神という神がおられ、悪霊や疫病など邪悪なものが集落に入り込んでこないように、辻や村の境・峠などで守護しておられた。後の道祖神である。我が国では、この二つが融合して、お地藏さんは庶民に身近なものとなった。閻魔さんの化身ともいわれ、閻魔さんの手口を熟知しておられるならこころ強いことこのうえない、地獄に落ちた死者を救いだすばかりか、身代わりとなってその苦を引き受けてくださるなど、なんとも奇特な方であった。庶民は「地獄に仏」とお地藏さんを信心した。

他の投手の苦を一身に引き受けられた稲尾投手は、仏様と手を合わせていただいたが、生身の人間で、肩を壊して選手生命を縮めてしまわれた。合掌（がっしょう）。

神様、仏様、稲尾様、長文にお付き合いいただきました方、ありがとうございます。

2014年1月10日 上田啓之